

地域看護学

1 構成員

	平成22年3月31日現在	
教授	2人	
准教授	0人	
講師（うち病院籍）	1人	（ 0人）
助教（うち病院籍）	2人	（ 0人）
助手（うち病院籍）	0人	（ 0人）
特任教員（特任教授，特任准教授，特任助教を含む）	0人	
医員	0人	
研修医	0人	
特任研究員	0人	
大学院学生（うち他講座から）	14人	（ 0人）
研究生	0人	
外国人客員研究員	0人	
技術職員（教務職員を含む）	0人	
その他（技術補佐員等）	0人	
合 計	19人	

2 教員の異動状況

- 巽 あさみ（教授）（H16. 4. 21～現職）
- 鈴木みずえ（教授）（H20. 8. 1～現職）
- 大塚 敏子（講師）（H20. 4. 1～現職）
- 菊地 慶子（助教）（H19. 4. 1～現職）
- 水田 明子（助教）（H20. 4. 1～現職）

3 研究業績

数字は小数2位まで。

	平成21年度	
(1) 原著論文数（うち邦文のもの）	2編	（ 2編）
そのインパクトファクターの合計	0.00	
(2) 論文形式のプロシーディングズ数	1編	
(3) 総説数（うち邦文のもの）	11編	（ 11編）
そのインパクトファクターの合計	0.00	
(4) 著書数（うち邦文のもの）	4編	（ 4編）
(5) 症例報告数（うち邦文のもの）	1編	（ 1編）
そのインパクトファクターの合計	0.00	

(1) 原著論文（当該教室所属の者に下線）

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 鈴木みずえ, 水野裕, グライナー智恵子, 深堀敦子, 磯和勅子, 坂本凉子, 宮園美沙子, 出口克巳, 金森雅: BrookerDawn重度認知症病棟における認知症ケアマッピングを用いたパーソン・センタード・ケアに関する介入の効果, 老年精神医学雑誌, 20(6), 668-680, 2009.
2. 鈴木みずえ, 水野裕, 深堀敦子, 住垣千恵子, グライナー智恵子, 磯和勅子, 大城一, 金森雅夫: Dijkstra Ate,日本語版ケア依存度尺度(Care Dependency Scale ; CDS)の信頼性・妥当性の検討老年精神医学雑誌, 21(2), 214-251, 2010.

インパクトファクターの小計 [0.00]

(2) 論文形式のプロシーディングズ

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. Tsuboi H, Sakakibara H, Tatumi A, Hamamoto R, Suzuki A, Kumazawa S, Matsunaga M, Kawanishi Y, Kaneko H, Simoi K: Some gene polymorphisms associated with lifestyle-related Diseases may affect depressive symptoms. 20th World Congress on Psychosomatic Medicine Torino, Italy, 2009.

(3) 総 説

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 巽あさみ, 住吉健一, 川口仁美, 佐野雪子: 短時間で行う積極的傾聴研修の効果-2時間30分で実施する管理監督者研修の検討-, 産業衛生学雑誌, 52, 81-91, 2010.
2. 巽あさみ: 女性労働者としての保健師の心身の健康問題を考える, 保健師ジャーナル, 66(3), 194-201, 2010.
3. 鈴木みずえ, 奥百合子, 常田佳代: 看護研究における転倒予防研究の意義と今後の課題, 看護研究, 42(3), 2009, 157-172.
4. 鈴木みずえ, 征矢野あや子, 安田真美, 金森雅夫, 本間昭, 武藤芳照: 認知症高齢者に対する転倒予防を目的とした多因子介入研究の動向と看護研究の課題, 看護研究, 42(4), 261-279, 2009.
5. 鈴木みずえ: 多職種チームで取り組む高齢患者の転倒・転落防止 転倒・転落防止にチームで取り組む意義, 看護, 62(2), 36-40, 2010.

インパクトファクターの小計 [0.00]

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1. 渡辺英樹, 鈴木みずえ: 認知症高齢者の転倒・転落事故予防 通所系サービスにおける認知症高齢者の転倒・転落防止の取り組み, 認知症介護, 10(2), 103-108, 2009
2. 村井千賀, 上野真季, 北村立, 鈴木みずえ: 認知症高齢者の転倒・転落事故予防 認知症病棟における運動プログラムを中心とした転倒予防, 認知症介護, 10(3), 51-58, 2009.

3. 鈴木奈緒子, 鈴木みずえ：認知症高齢者の転倒・転落事故予防 急性期医療施設における多職種による転倒・転落予防策, 認知症介護, 10(1), 55-62, 2009.
4. 牧野公美子, 水田明子, 菊地慶子, 鈴木みずえ：高齢者の転倒に潜んだ真のニーズとその人のQOLを踏まえたケアプランを考える転倒予防指導者養成講座を開催して, コミュニテークア, 11(10), 64-69, 2009.
5. 上原かなめ, 鈴木みずえ：認知症高齢者の転倒・転落事故予防 生活全体の視点からの転倒・転落事故予防, 認知症介護, 11(1), 89-93, 2010.
6. 武藤芳照, 鈴木みずえ, 上内哲男：施設内での転倒を減らしていくために転倒予防のコツ伝授教室入院編 (CD), エーザイ, 2010.

インパクトファクターの小計 [0.00]

(4) 著 書

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 鈴木みずえ：鈴木みずえ (編集), パーソンセンタードケアマッピングの現状と報告性, 1-16, 認知症ケアマッピングを用いた パーソン・センタード・ケア実践報告集, クオリティケア, 2010.
2. 鈴木みずえ：高齢者の閉じこもり予防, 保健師教育研究会, 保健師国家試験予想問題2010, 114-116, 2009.
3. 鈴木みずえ：転倒, 転倒予防, 介護予防ケアマネジメント, ファンクショナルリーチ, 転倒恐怖感, 高齢者総合機能評価, 生活機能評価, 閉眼片足立ち, パーソン・センタード・ケア, そのひとらしさ, 認知症ケアマッピング, センター方式, 回想法, 和田 攻 (総編集) 看護大事典 第2版 (単行本), 2010.

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの

1. 柳川洋, 尾島俊之, 北村邦夫, 中村好一, 巽あさみ, 菊地慶子, 倉田貞美, 近藤今子, 柴田陽介, 千原泉, 西山慶子, 長谷川拓也, 原岡智子, 船橋香織里, 安田孝子, 渡辺晃紀：保健指導ノート保健師の活動状況, 2010 公衆衛生の現状, 社団法人日本家族計画協会, 東京都新宿区, p10-1-p10-6, p11-1-p11-8, 2009.

(5) 症例報告

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの (学内の共同研究)

1. 尾島俊之, 早坂信哉, 安田孝子, 巽あさみ, 菊地慶子：平成21年度浜松市民の健康づくり調査報告書, 2010.

インパクトファクターの小計 [0.00]

4 特許等の出願状況

	平成21年度
特許取得数 (出願中含む)	0件

5 医学研究費取得状況

	平成21年度
(1) 文部科学省科学研究費	4件 (240万円)
(2) 厚生労働科学研究費	0件 (0万円)
(3) 他政府機関による研究助成	0件 (0万円)
(4) 財団助成金	0件 (0万円)
(5) 受託研究または共同研究	1件 (70.9万円)
(6) 奨学寄附金その他(民間より)	0件 (0万円)

(1) 文部科学省科学研究費

- ・ 巽 あさみ(研究分担者) 生活習慣病予防に対する保健指導の横断的な質の評価－評価指標と方法の開発－ 30万円(継続)
- ・ 鈴木みずえ(研究代表者) 基盤研究(B) EBNに基づいた認知症高齢者のための日本型リスクマネジメントの開発と理論化 160万円(継続)
- ・ 鈴木みずえ(研究分担者) 基盤研究(A) 高齢者訪問看護質指標を用いたインターネット訪問看護支援システムの有効性検討 研究代表者 山本則子 15万円(継続)
- ・ 大塚 敏子(研究代表者) 若手研究(スタートアップ) 高校生の喫煙行動へのポピュレーションアプローチおよびリスク別アプローチの効果検討 35万円(継続)

(5) 受託研究または共同研究

- ・ 巽あさみ 静岡県 子ども家庭相談センター
睡眠に着目した保健指導マニュアル作成 709,632円(新規)

7 学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	0件	1件
(2) シンポジウム発表数	0件	1件
(3) 学会座長回数	0件	5件
(4) 学会開催回数	0件	1件
(5) 学会役員等回数	0件	13件
(6) 一般演題発表数	3件	

(1) 国際学会等開催・参加

5) 一般発表

ポスター発表

- ・ Suzuki M, Yutaka M, Sakamoto S, Miyazono M, Deguchi K, Greiner C, Fukahori A, Isowa T, Masao Kanamori M, Brooker D, Action research on person-centered care using Dementia Care Mapping for elderly individuals with dementia: qualitative analysis for Feedback discussion. The 1st International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science, September 19, 2009.

- ・ Suzuki M, Mizuno Y, Sakamoto R, Miyazono M, Deguchi K, Greiner C, Fukahori, Isowa T, Kanamori M, Brooker D, Action research on person-centered care using Dementia Care Mapping for elderly individuals with dementia: Qualitative analysis for Feedback discussion. 19th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics, July 14, 2009.
- ・ Kikuchi K, Murata C, Kondo I, Shibata Y, Funahashi K, Yasuda T, Haraoka T, Ueda M, Nakamura M, Hayasaka S, Noda T, Tatsumi A, Suzuki M, Otsuka T, Mizuta A, Ojima T : Relationship between skipping breakfast and cellular phone use among teenagers. The Joint Scientific Meeting of IEA Western Pacific Region and Japan Epidemiological Association, January, 2010, Saitama, Japan.

(2) 国内学会の開催・参加

1) 主催した学会名

鈴木みずえ, 第6回転倒予防医学研究会研究集会の企画・運営, 主催 転倒予防医学研究会世話人会、後援：厚生労働省, 東京消防庁, 「運動器の10年」日本委員会, 平成21年10月4日, ニッショーホール

2) 学会における特別講演・招待講演

鈴木みずえ, 日本認知症ケア学会 教育講演 転倒の対応, 主催：日本認知症ケア学会, 認知症介護研究・研修東京センター, 平成21年10月29日, 東京国際フォーラム

3) シンポジウム発表

巽あさみ 第17回日本産業ストレス学会, 「看護職によるストレス対策の新展開：病気休業中労働者の支援における看護職の役割」平成21年11月28日, 福岡

4) 座長をした学会名

巽 あさみ 第55回東海公衆衛生学会, 2009年7月, 名古屋

巽 あさみ 平成21年度日本産業衛生学会東海地方会学会, 2009年11月, 名古屋

鈴木みずえ 第6回転倒予防医学研究会研究集会, 2009年10月, 東京

鈴木みずえ 第29回日本看護科学学会学術集会, 2009年11月, 千葉

鈴木みずえ 第35回日本看護研究学会学術集会, 2009年8月, 神奈川

(3) 役職についている国際・国内学会名とその役割

巽 あさみ 日本産業衛生学会 代議員

巽 あさみ 日本産業衛生学会 東海地方会 理事

巽 あさみ 東海公衆衛生学会 評議員

巽 あさみ 日本看護医療学会 査読委員

巽 あさみ 日本産業ストレス学会 理事、編集幹事

巽 あさみ 日本産業衛生学会 産業精神衛生研究会世話人

巽 あさみ 日本産業衛生学会 職場ストレス研究会 ワーキングメンバー

- 巽 あさみ 日本産業衛生学会 就労女性健康研究会世話人
- 鈴木みずえ 日本看護科学学会 評議委員
- 鈴木みずえ 日本看護研究学会 評議委員・査読委員
- 鈴木みずえ 日本老年看護学会 評議委員・日本老年看護学会誌編集委員
- 鈴木みずえ 日本認知症ケア学会 評議委員・査読委員
- 鈴木みずえ 転倒予防医学研究会 世話人・学術委員

8 学術雑誌の編集への貢献

	国内	外国
学術雑誌編集数（レフリー数は除く）	0件	0件

(3) 国内外の英文雑誌のレフリー

- 鈴木みずえ：2回 Geriatrics and Gerontology International (日本)
- 鈴木みずえ：1回 Japan Journal of Nursing Science (日本)

9 共同研究の実施状況

	平成21年度
(1) 国際共同研究	2件
(2) 国内共同研究	3件
(3) 学内共同研究	1件

(1) 国際共同研究

- ・鈴木みずえ：Ate Dijkstra (Department of Nursing Science, University of Groningen, Groningen, オランダ) 日本語版ケア依存度尺度(Care Dependency Scale ; CDS) の信頼性・妥当性の検討および国際比較研究, 老年精神医学雑誌, 21 (2), 214-251, 2010に発表。
- ・鈴木みずえ：Dawn Brooker (Director of the University of Worcester Association for Dementia Studies、英国), 認知症ケアマッピングを用いた認知症看護の質の向上に関する研究, 19th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics, July 14, 2009などで発表。

(2) 国内共同研究

- ・荒木田美香子(国際医療福祉大学), 巽あさみ, 綾部明江(国際医療福祉大学), 金川克子(石川県立看護大学) 生活習慣病予防に対する保健指導の横断的な質に評価-評価指標と方法の開発-(基盤研究 B)
- ・鈴木みずえ, 泉キヨ子(金沢大学), 平松知子(金沢大学), 金森雅夫(成蹊スポーツ大学), 安田真美(三重県立看護大学), 本間昭(認知症介護研究・研修東京センター), 斎藤真(三重県立看護大学), 征矢野あや子(佐久大学), 牧野公美子：EBMに基づいた認知症高齢者のための日本転倒リスクマネジメントの開発と理論化(基盤研究B)
- ・鈴木みずえ, 牧野公美子, 巽あさみ, 大塚敏子, 水田明子, 菊地慶子, 木本明恵(日本スウェーデン福祉研究所), 藤原清恵(和恵会記念病院), 阿部邦彦(和恵会記念病院), 林辰弥(三重県立看護大学)：ソフトマッサージが高齢者と看護師に及ぼす行動・心理・生理学的効果の検討

(3) 学内共同研究

- ・尾島俊之，早坂信哉，安田孝子，巽あさみ，菊地慶子：平成21年度浜松市民の健康づくり調査，2010.

10 産学共同研究

	平成21年度
産学共同研究	0件

12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

1. うつ病・自殺予防のための睡眠保健指導に着目した研究：日本の自殺者は平成10年より12年連続で3万人を越えており，自殺者の減少は喫緊の課題である。自殺の原因としてうつ病が指摘され，特に現役世代のうつ病の発生率が近年は以前の3倍に増加していると言われている。そして睡眠障害はうつ病に多く見られる症状であり，適切な睡眠をとることで人々のQOLが向上することは今までに多くの報告がある。しかし，実際に保健指導の効果を検討した研究は少ない。今年度は保健指導マニュアル案を作成し，保健指導実践の準備期間とした。次年度は健康診断時に睡眠アセスメントを実施し，必要に応じて保健指導を検討し，うつ病や生活習慣病につながる睡眠障害の一次予防，二次予防としての効果的な活動をめざして具体的な睡眠保健指導プログラムの開発につなげていく予定である。

(巽あさみ)

2. 生活習慣病予防に対する保健指導の質の評価に関する研究；平成20年度から開始された特定保健指導はその質の評価指標の開発が待たれているところである。保健指導の対象者の健康管理能力を包括的に把握するための指標であるHealth Education Impact Questionnaireの日本語版を用いて評価することおよび保健指導の実際のプロセスの検討をバリエーション分析手法を用いて実施することを進めており，今年度は積極的支援を実施したものと，情報提供を実施したものと同様のアウトカムが得られていた。今後はアウトカムとのバリエーション分析の突合せを実施することによって行動変容を妨げる因子を明らかにしていく必要がある。

(巽あさみ，大塚敏子，水田明子，内野保都美，荒木田美香子)

3. EBMに基づいた認知症高齢者のための日本転倒リスクマネジメントの開発と理論化

認知症高齢者は転倒を繰り返しており，高齢者施設の重要な課題となっている。本研究はEBNに基づいた認知症高齢者のための日本型リスクマネジメントの開発と理論化を目的とした。高齢者施設を対象に実施した全国調査結果から転倒リスクアセスメントツールの使用が転倒リスクマネジメント，特にケアプランの立案に有意な関連のあることが明らかになった。また，認知症高齢者の転倒リスクアセスメント項目は認知症の行動・心理症状（BPSD）に関連した3因子10項目であることを明らかにした。さらに，老人保健施設の看護師・介護士とともに転倒予

防のアクションリサーチ研究に1年間取り組んだ。以上から、日本型転倒リスクマネジメントとしては転倒を予測するための転倒リスクアセスメントと転倒後の事故報告分析の両側面からのアプローチが有効であること、認知症高齢者の視点を結合させた転倒リスクマネジメントモデルを構築する必要性が明らかになった。

(鈴木みずえ, 牧野公美子)

4. 認知症高齢者に対するソフトマッサージ（タクティールケア）の認知機能と認知症の行動と心理症状（BPSD）に対する有効性、本年7月に開催の国際アルツハイマー学会（ICAD2010）で発表するが、認知症高齢者の認知機能や周辺症状などの改善や実施した看護師の意欲の向上が示唆された。タクティールケアの効果としてストレス指標である唾液Chromogranin Aの変化などを明らかにした世界でも最初の実証研究である。一般商業誌（日経ヘルスプルミエ）や静岡新聞で取り上げられ、看護師の手を用いた癒しのプロセスを促進する看護アプローチの新しい展開として注目されている。

(鈴木みずえ, 巽あさみ, 大塚敏子, 菊地慶子, 水田明子, 牧野公美子)

5. 高校生の喫煙関連要因の検討および喫煙防止教育介入の効果に関する研究

本研究では従来から実施されてきたポピュレーションアプローチに加え、リスク別のアプローチとして生徒のリスク状況を考慮した喫煙防止教育プログラムを開発し、段階的に実施した。結果、将来喫煙のリスクが比較的高い生徒に対する行動面および知識、認識等への効果が確認された。従来のポピュレーションアプローチ単独で行われる喫煙防止教育では得にくかった喫煙行動に対する効果が確認されたことは意義深いと考える。本プログラムは、これまで健康教育としてアプローチすることが難しかったリスクの高い生徒に対しても授業やホームルームの中でリスクに応じたアプローチできること、担任や養護教諭などが予防的なアプローチとして実施しやすいことから、高等学校のような将来喫煙のリスクが多様な集団への支援方法として有効である。また、従来の喫煙防止プログラムに比べ比較的短時間で実施できることやスライドなどの利用により学校において導入が容易であり活用性が高いといえる。

(大塚敏子)

6. 第1回浜松医科大学地域看護学セミナー、タクティールケアの起源と実技および認知症ケアに取り入れた事例紹介、日本スウェーデン福祉研究所、保健・医療・福祉関連の従事者および学生、約250名、浜松医科大学、平成22年2月6日

(鈴木みずえ, 巽あさみ, 大塚敏子, 菊地慶子, 水田明子, 牧野公美子)

13 この期間中の特筆すべき業績、新技術の開発

1. 第9回転倒予防指導者養成講座、武藤芳照・鈴木みずえ他、主催：転倒予防医学研究会・浜松医科大学医学部看護学科、高齢者介護施設従事者、浜松医科大学、平成21年5月23・24日
2. 地域看護学講座第1回浜松医科大学地域看護学セミナー「タクティールケアの認知症ケアにおける実践と今後の保健・医療・福祉分野における応用」、担当者名：鈴木みずえ, 巽あさみ, 大

塚敏子，菊地慶子，水田明子，開催者名：浜松医科大学地域看護学講座，協力機関：日本スウェーデン福祉研究所，参加者：保健医療福祉専門職など250名，場所：浜松医科大学，平成22年2月6日

14 研究の独創性，国際性，継続性，応用性

1. 認知症高齢者に対するソフトマッサージ（タクティールケア）の認知機能と認知症の行動と心理症状（BPSD）に対する有効性，本年7月に開催の国際アルツハイマー学会（ICAD2010）で発表，認知症高齢者の認知機能や周辺症状などの改善や実施した看護師の意欲の向上が示唆された。タクティールケアの効果としてストレス指標である唾液Chromogranin Aの変化などを明らかにした世界でも最初の実証研究である。一般商業誌（日経ヘルスプルミエ）や静岡新聞で取り上げられ，看護師の手を用いた癒しのプロセスを促進する看護アプローチの新しい展開として注目されている。

（鈴木みずえ，巽あさみ，大塚敏子，菊地慶子，水田明子）

15 新聞，雑誌等による報道

1. 鈴木みずえ：転倒事故の原因探る 浜松医大など介護従事者へ講座，静岡新聞 平成21年5月26日
2. 鈴木みずえ，巽あさみ，大塚敏子，菊地慶子，水田明子，牧野公美子：浜松医科大学でタクティールケアのセミナー，静岡新聞 平成22年1月8日
3. 鈴木みずえ，巽あさみ，大塚敏子，菊地慶子，水田明子，牧野公美子：やさしく触れるタクティールケア 浜松で講座：がん，認知症に緩和作用，静岡新聞 平成22年2月19日
4. 鈴木みずえ：介護の現場でも注目されるタクティールケア：認知症患者との言葉を越えたコミュニケーション手段，p.35，日経ヘルスプルミエ，3, 2010